住友財団文化財維持・修復事業助成

よみがえる漆器

ーモンゴル出土漢代漆器の保存修復

はじめに

紀元前３世紀末から紀元後２世紀にかけて、万里の長城より北の草原地帯では匈奴（きょうど）が勃興（ぼっこう）しました。その匈奴が残した遺跡は、現在のモンゴル国、ロシア連邦ブリヤート共和国、中国に分布しています。中でも最も多くの遺跡があるのはモンゴル国で、現在 7000 基をこえる匈奴の墓が知られています。近年は王陵級の匈奴墓の調査が進み、シルクロードを通じて伝わってきたローマングラスや銀器、漢から獲得した大量の絹織物など豪華な副葬品が出土したことから人々を驚かせました。今回修復した漆器はそのような漢から匈奴に伝わった漆器の中の２点で、当時の最高級漆器です。

漆器は保存が難しい出土文化財の１つで、壊れた状態で出土した後、年々状態が悪化していました。そのため、住友財団の「海外の文化財維持・修復事業助成」をうけて 2020 年より修復を進めてまいりました。今回の展示は、モンゴル国へ返還前に、泉屋博古館において特別に展示するものです。約 2000 年前の漆器の姿を多くの方々に見ていただきたいと思います。

漆器が出土した遺跡

■ゴル・モドⅠ墓地

1956 年に発見された匈奴の王陵級の墓がある墓地。418 基の墓が集まる大古墳群で、2000 ～ 2005 年にモンゴル・フランス共同調査団が発掘調査を行った。

■チャンドマニ・ハル・オール遺跡

一般的な匈奴墓の形態である、地表上に積石のある円墳が集まった墓地。2003 年からモンゴル科学アカデミー考古学研究所によって断続的に発掘調査されている。

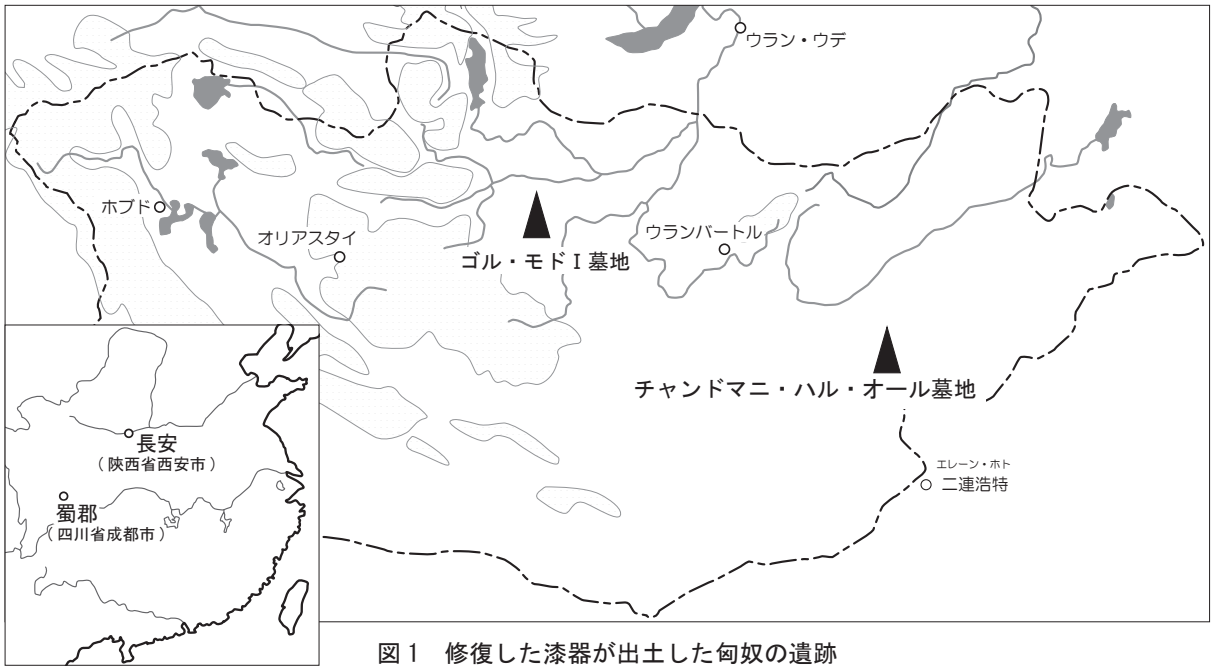
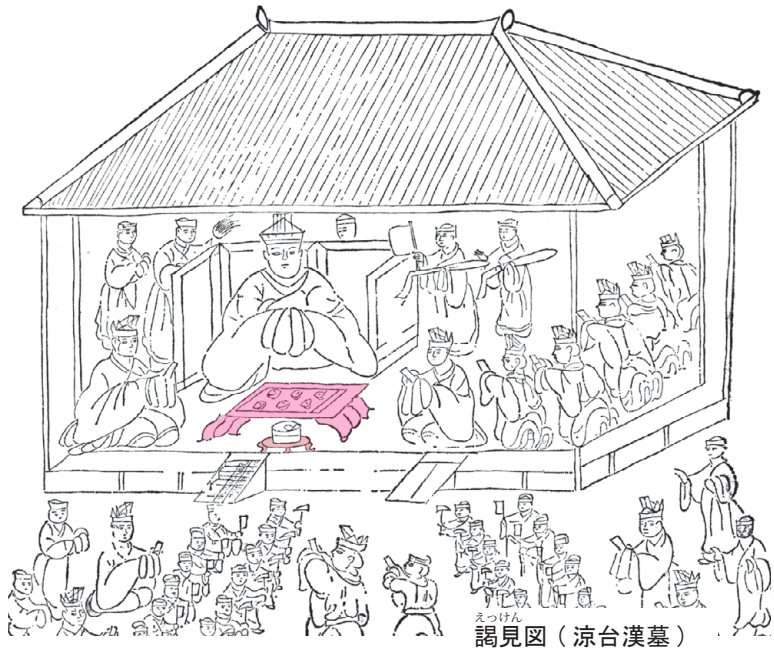


図１　修復した漆器が出土した匈奴の遺跡

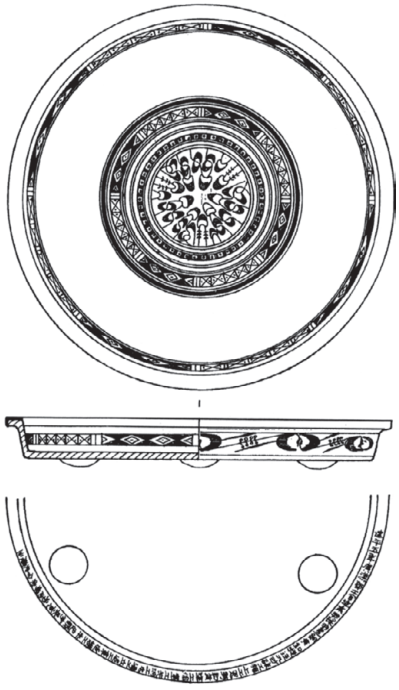
修復した 2 点の漆器について

修復した漆器は、①チャンドマニ・ハル・オール 7 号墓から出土した耳杯と、②ゴル・モドⅠ 20 号墳から出土した旋の 2 点です。2 点の漆器は皇帝が使用するために製作された乗輿の品であることが銘文に記されており、当時の最高級漆器であることが分かります。

2 つの漆器は同じ年に製作されていますが、耳杯は当時の蜀郡にあった蜀郡西工、旋は漢の都・長安にあった供工という異なる官営工房で製作されたことが判明します (図 1)。銘文にはこの器がどのような器であるかという規格であったり、誰が工程を担当したのかが細かく書かれていますが、これは責任の所在を明記して、製品と製作者を管理するためのものです (もし銘文の内容に合わない不良品があると罰せられます)。2 つの漆器はどちらも食器で、耳杯は酒や羹を飲むための器でした。旋はというと、酒や羹を入れる円筒形の「尊」という容器をのせた三足つきの承盤です (酒や羹は尊から汲み出してサーブされます)。木製の旋の実物は鷂子嶺遺跡でも出土しており、ゴル・モドⅠ 20 号墓から出土した旋もおそらくこのような形をしていたものと考えられます。



謁見図（涼台漢墓）



旋　（鷂子嶺 6 号墓）

耳杯などがならぶ食膳（復元：石巌里 9 号墓）

資料①　耳杯

【銘文の意味】永始元年 (BC 16 年)、蜀郡西工造る。乘輿 (皇帝使用) の品。髹漆し、画をえがき、木胎で、耳部分に金メッキした青銅の覆輪のある棓。容量は一升十六龠 (約 232㎖)。素工 (木で素地を作る工人) の宗、髹工 (漆下塗りをする工人) の褒、上工 (漆上塗りをする工人) の裒、銅耳黄塗工 (青銅で造った耳部の覆輪に金メッキをする工人) の□、画工 (文様を描く工人) の卒、汧工 (磨きをかける工人) の……長の孝、丞の畧、掾の譚、守令史の通が主る。

【底部の朱書】「衛蒙福」はおそらく吉祥句。

深井純撮影

資料②　旋

【銘文の意味】……夾紵(きょうちょ)で作った金銅の覆輪(ふくりん)のある一尺五寸 (34.5cm) の旋(せん)。永始元年 (BC 16 年) に供工(きょうこう)の工である武が造(つく)る。護の臣敬、□□……掾(えん)の臣昌が主(つかさど)る。右丞(うじょう)の臣□、守令の臣並(へい)が省(み)る。

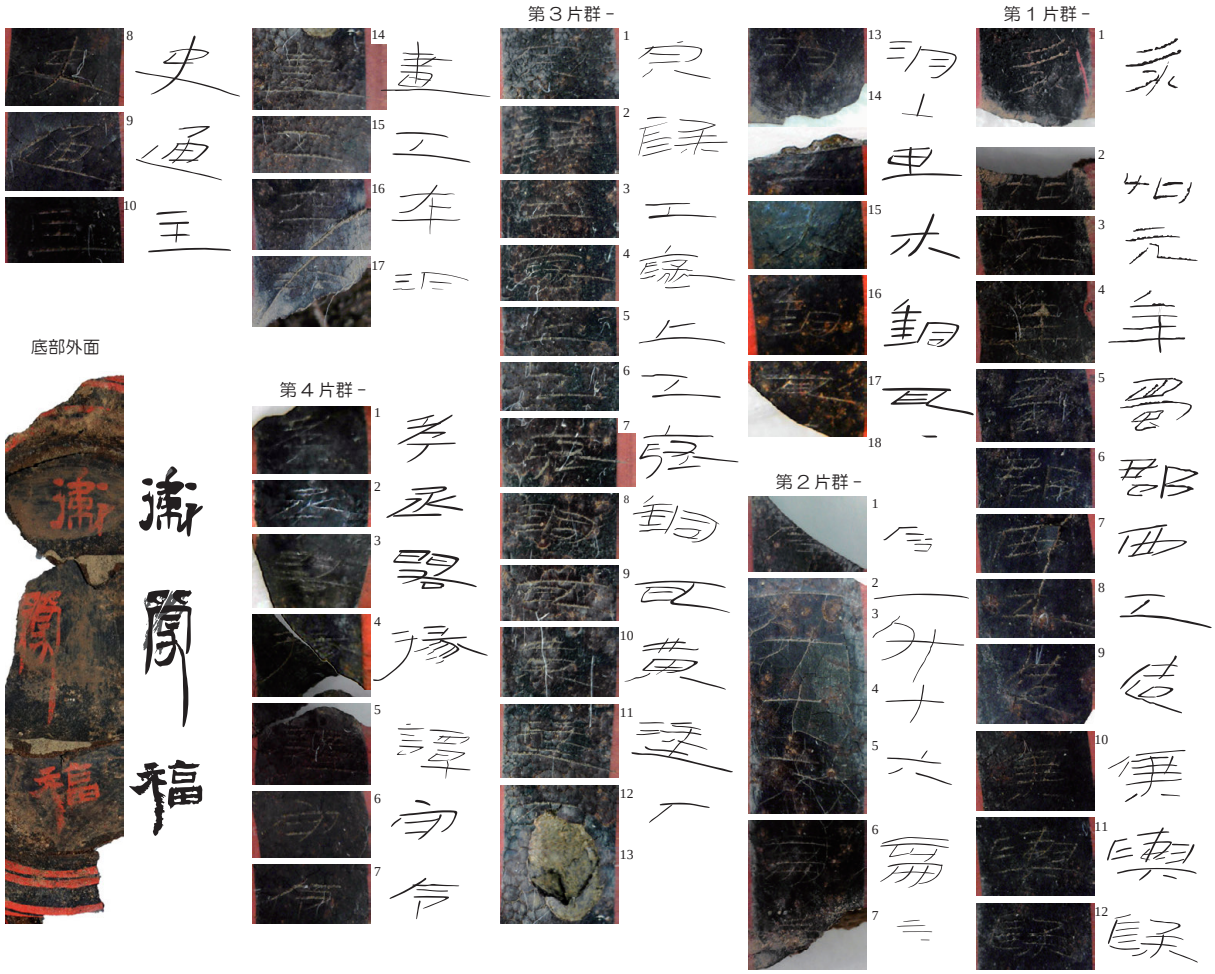
深井純撮影

旋

深井純撮影

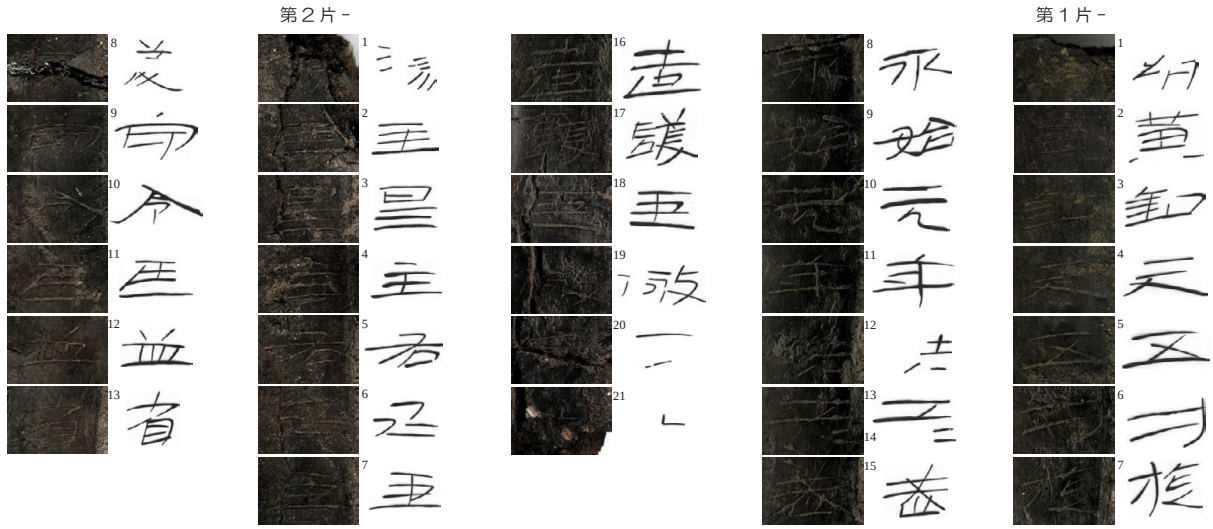
銘文のある破片の拡大

■耳杯の銘文



永始元年 蜀郡西工造 乘輿 髹汧 [畫] 木銅耳黄塗棓 容一升十六龠 [素] 工 [宗] 髹工褒 上工裒 銅耳黄塗工□ 畫工卒 [汧] 工……長孝 丞碧 掾譚 守令史通主　　底部の朱書：衞蒙福

■旋の銘文



……[紵] 黄釦尺五寸旋 永始元年 [供] 工[武] 造 護臣 [敬] □□……掾臣 [昌] 主 右丞臣□ 守令臣並省

漆器の修復

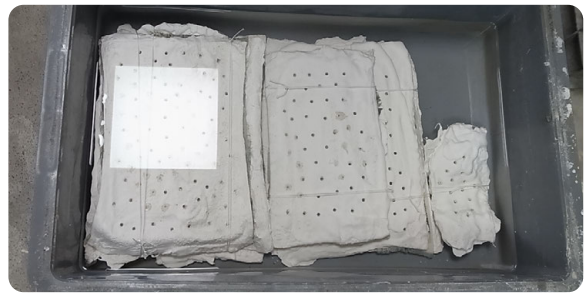
①モンゴル国から漆器が到着

【耳杯】発掘された直後の状態

②漆器片を確認しながら修復方針の検討

【旋】水浸(づ)け (工程③) にした状態

③できるだけ元の形に戻すために水浸(づ)けにする。土などの汚れも超音波洗浄で落とす。(白いものは大きく変形しないように漆器をはさむ石膏の型)



④高級アルコールを含浸して強化

⑤文様や銘文を手がかりに復元案を決める

⑥漆器片を接合し、欠損箇所へ樹脂を補填(ほてん)

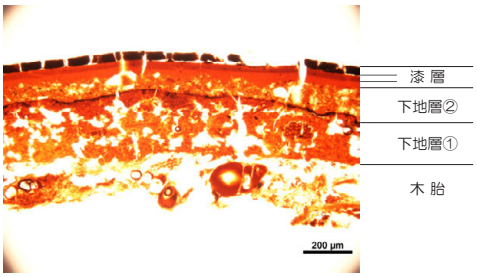
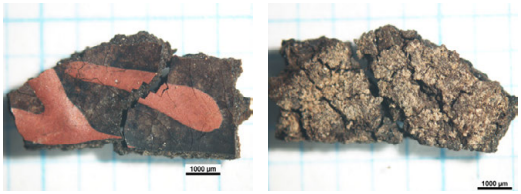
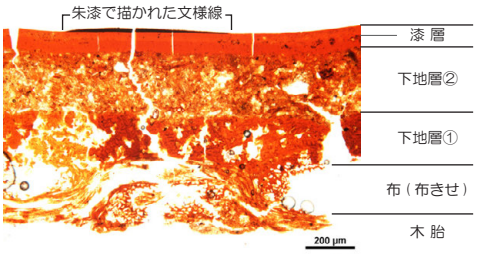
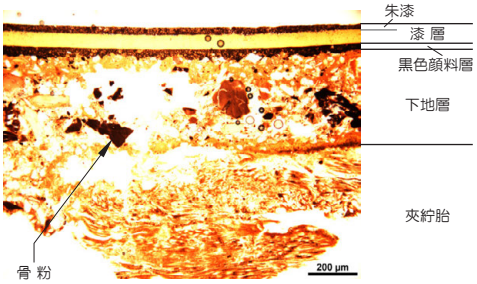
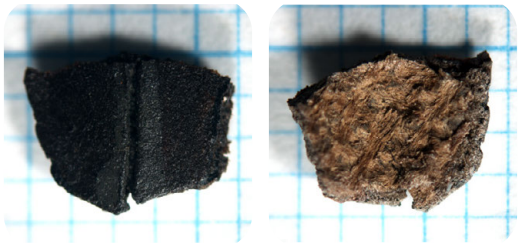
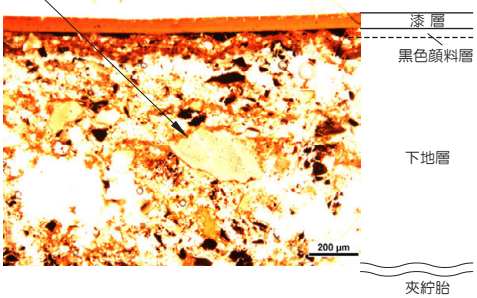
⑦補填(ほてん)した樹脂部分へ補彩

【耳杯】漆器片をのせる専用の安定台を作製

顕微鏡観察による漆芸技法の調査

ばらばらになっていた漆器の小さな破片から、プレパラートを作って顕微鏡でその断面を確認しました。銘文の中に、耳杯(じはい)は器の土台が木(木胎(もくたい))、旋(せん)は苧麻(ちょま)の織物(夾紵胎(きょうちょたい))と書かれていましたが、確かにそうであることが確認できます。プレパラートからは、下地を塗ったり、漆も何回も塗り重ねている様子が観察できます。

破面からみえる
布きせの織物織目

		プレパラートを作った破片	プレパラートの写真
耳杯	内面		
耳杯	耳部		
旋	内面（朱漆部分）		
旋	外面		

京都大学 KYOTO UNIVERSITY

МОНГОЛ УЛСЫН ШИНЖЛЭХ УХААНЫ АКАДЕМИ АРХЕОЛОГИЙН ХҮРЭЭЛЭН

株式会社 吉田生物研究所 YOSHIDA BIOLOGICAL LABORATORY

泉屋博古館 SEN-OKU HAKUKOKAN MUSEUM

2022 年 3 月 24 日発行
発行　公益財団法人泉屋博古館
〒 606-8431　京都市左京区鹿ケ谷下宮ノ前町２４

本冊子は 2021 年度住友財団その他助成により刊行しました。